

余録

レオナルド・ダ・ヴィンチの「ヴィンチ」とはもともと柳を指す。故郷の村名も自生する柳に由来し、村民はその枝で籠などを編んだ。この柳の枝の図案をダ・ヴィンチは自らのエンブレムとした▲東京・渋谷のBunkamuraザ・ミュージアムの「レオナルド・ダ・ヴィンチ美の理想」展に入ると、デューラーが木版画にしたダ・ヴィンチの「柳の枝の飾り文様」に迎えられる。「モナ・リザ」の服にもまるでダ・ヴィンチの署名のように用いられた文様だ▲「われわれは自分に似たものを好むようだ。しばしば描いた人物はそれを描いた画家に似ている」はダ・ヴィンチの絵画論である。そういえばかつてコンピュータの画像分析で「モナ・リザ」はダ・ヴィンチの自画像だとの説を発表して世を驚かせた研究者もいた▲そのモナ・リザをモチーフにした後世の画家の多彩な作品や、若きダ・ヴィンチの衣紋の習作、弟子との共作の「岩窟の聖母」など、80点余の展覧である。その白眉というべきダ・ヴィンチ円熟期の傑作「ほつれ髪の女」は500年のほほ笑みをたたえてそこにいた▲「モナ・リザ」や『最後の晩餐』を凌駕する時空を超えた美」と評されるこの作品である。伏せたまなざし、かすかな口元の笑み、精緻に描かれた顔と対照的に大胆にぼかされたほつれ髪。今にも変化しそうな表情を見つめるうちにスッと引き込まれそうになる▲光と影の織りなす「美の理想」に酔わされたような何十秒間かだった。あの優美な女性も老齢を迎えていたダ・ヴィンチの「自画像」だったのか。会場を出てしばらくそんな空想が頭を去来した。